

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04756

研究課題名(和文)戦後の「社会科世界史」の理論と実践が有する特質の解明

研究課題名(英文)Historical Characteristics of the Theory and Practice of Social Studies World History Education in Japan

研究代表者

茨木 智志 (IBARAKI, Satoshi)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：30324023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後において社会科教育としての世界史学習を追究してきた「社会科世界史」の特質を、その理論と実践に焦点を当て、歴史的に解明することを目指したものである。日本の高等学校では、従来の歴史教育からの脱却と社会科に基づく新たな歴史教育の創造を意図して、学習者自らが歴史像・世界史像を作り上げていく教育の実現が、学校や生徒の状況、社会の環境、教育研究や歴史研究の動向などに対応しつつ、様々な場面で継続的に取り組まれてきたことを、教科書、授業、教師などの諸側面を通じて提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、生徒が歴史像・世界史像を自ら作り上げていく教育の実現を目指していた「社会科世界史」の取り組みを、今日において再評価することを意図している。その特質を明示するために、歴史教育史研究の手法を駆使して、世界史教育の出発時に直面していた戦前の歴史教育の検討から進め、「社会科世界史」模索の様々な状況をいくつかの側面から考察した。本研究で提示した、これまでの「社会科世界史」の取り組みは、将来の歴史教育を検討する際に有益な情報を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the characteristics of "Social Studies World History" which has been pursuing learning as Social Studies education, focusing on its theory and practice. Teachers in charge of the new subject "World History" established in 1949 made an effort to overcome traditional history education and create new history education based on Social Studies. The "Social Studies World History" class aimed to help students create their own images of world history. "World History" teachers have continued their efforts to realize the ideal "Social Studies World History" class through activities such as textbook writing in addition to class practice activities.

研究分野：社会科教育(歴史教育)

キーワード：社会科世界史 社会科歴史教育 世界史教育 世界史教科書 世界史教育理論 世界史授業実践 歴史教師 歴史教育史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高校の世界史教育について、「世界史未履修問題」の発覚以来、新科目創設や入学試験の改革、新たな学習方法の導入などの議論が進められている。討議は盛んながら、その実は混迷を深めているのが現状である。根本には、世界史が歴史教育として世界史の知識を系統的に生徒に習得させていく学習として進められてきたことの転換のあり方がある。しかし、歴史教育の歴史的展開を探っていくと、すでに世界史教育は出発点から「社会科世界史」と称して、社会科教育として生徒自らが歴史像・世界史像を作り上げていく学習として追究されていたことが確認できる。ただし、当初は推進していた教育行政すらもその後において実質的に「社会科世界史」を放棄する形となっている。これまで低い評価を受け、また漠然と言及されるに留まっていた「社会科世界史」を再評価することで、今後の世界史教育さらには歴史教育を検討していくための共有財産とすることが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後において社会科教育としての世界史学習を追究してきた「社会科世界史」の特質を、その理論と実践に焦点を当てて、歴史的に解明することにある。

3. 研究の方法

本研究では、戦後の「社会科世界史」の展開を 1950 年代前半、1950 年代後半、1960 年代～1980 年代、1990 年代～現在に分けて、各時期における理論と実践を分析し、これに「社会科世界史」が克服もしくは脱却の対象とした戦前の歴史教育の分析を加え、それらを総合して「社会科世界史」の理論と実践の特質を考察していく。具体的には、教科書や各種文献をはじめ、聞き取り調査を含めて、「社会科世界史」への取り組みについて情報を収集して分析を進めていく。

4. 研究成果

(1) 「社会科世界史」の前提

「社会科世界史」の取り組みは、戦後の新制高等学校発足の翌年である 1949 年に新科目「世界史」の設置により始まる。「社会科世界史」が直面した課題として従来の歴史教育があった。具体的には、まず戦争中の歴史教育があり、敗戦で改められた歴史教育があった。これらがいかなるものであったのかが、「社会科世界史」の前提として解明される必要がある。

戦争中の中等段階の諸学校での歴史教育は、ほとんど研究がなされていないため、五種選定期の歴史教科書と国定期の歴史教科書について、戦後の歴史教育の観点から基本的な考察を実施した。ここでは、戦前の複雑な学校制度や戦時に対応した教育内容、戦況悪化による教育の混乱などが反映した歴史教科書の作成・発行・使用の状況を確認した。

戦争中の歴史教育は、敗戦により中止されて戦争終結に対応した歴史教育への改編が求められた。その一例として、戦争中の国定中等外国史教科書への敗戦以後の墨塗り教科書を取り上げて、墨塗り箇所を検討した担当教師の考えた歴史教育の戦時から平時への転換を考察した。

その後、暫定教科書の発行(1946年)、高校社会科「東洋史」「西洋史」の設置と実施を経て、「世界史」の設置と実施へと進む。「社会科世界史」は戦争中から敗戦以後のこれらの歴史教育への克服もしくは脱却を背景として取り組まれたものであった。授業内容としては東洋史・西洋史という外国史教育をいかに世界史教育としていくか、敗戦以前の外国史教育から残された視点の問題を敗戦以後の世界や社会に対応していくか改善していくか、授業方法としては従来の知識中心の歴史教育をどのように転換していくかなどが課題となった。「社会科世界史」の前提となる課題が、敗戦の前後の時期の外国史教科書から確認できる。

(2) 「社会科世界史」授業の出発と展開

1949 年から始まった出発時の「世界史」の授業がどのようなものであったのかを、当時の史料やその後の回想、聞き取りなどの調査を通じて、考察した。突然に実施という形で開始された「世界史」に対して一種の混乱状況が見られる中で、実に多くの模索がなされていたことが確認できる。特に、「社会科世界史」としての特徴を積極的に活かした授業実践の取り組みが注目される。これらの授業実践では教育内容としての世界史はいかにあるべきかの検討と、従来とは異なる歴史授業のあり方の検討が同時に取り組まれている。また、授業選択の状況を見ると、全体的に生徒が「世界史」に大きな期待をもって履修していたことも確認できる。

その後の世界史教育の展開の中では、世界史とは何かを追究しつつ社会科としての世界史教育のあり方の検討が継続していたことが確認できる。特に、現在(当時)の世界情勢の変化を反映させ、日本の世界観・世界史観の偏りを自覚させ、自らが歴史像・世界史像を作り上げるための授業を、「世界史」という授業だからこそできる可能性を追究した様々な取り組みが存在したことが確認できる。これらの「社会科世界史」の取り組みの背景には、学習指導要領や教科書を通じて「世界史」の内容が次第に定型化し、さらには大学入学試験の「世界史」問題のあり方と相まって世界史学習の方法や評価も固定化されていったことがある。

(3) 「社会科世界史」教科書の出発と展開

「世界史」教科書について「社会科世界史」の観点から考察した。授業が開始された 1949 年から 3 年間は正式な意味での教科書ではない、いわゆる準教科書が作成・使用された。この時期

の「世界史」教科書は、劣悪な出版状況もあり、粗削りとも言えるものも存在したが、内容、構成、作成主体、対象生徒、形式ともに実に多種多様で、あらゆる可能性を持った自由な世界史教育を前提としていた。1952年度から検定教科書の使用が始まる。当初の「世界史」検定教科書は、準教科書の時期のもの比べると多様さは縮小しているが、その後の「世界史」検定教科書と比べると設問の存在や参考文献の記載などにおいて学習の素材としての側面は保持していた。一方で、「世界史」教科書の出発時は、準教科書・検定教科書ともに、欧米の近代市民社会を到達点とする視点が強かった。この点は「社会科世界史」の観点から批判の対象となっていく。

1970年代の特定の「世界史」教科書発行について、「社会科世界史」の観点から取り上げた。この「世界史」教科書は、内容の選択・構成、授業の目的・方法などについて従来の世界史教育を根本的に改める意図をもって高校教師たちによって執筆されたものであった。この意図に対して、いわば従来の世界史教育がいかに対峙したのかを、教科書検定の経緯を通じて考察した。学習指導要領や他の教科書での固定化され、規範化された「世界史」に対する「社会科世界史」からの批判として位置づけることができる。

(4) 高校歴史教師の取り組み

本研究の研究期間において3名の元高校教師への聞き取り調査をまとめた。戦中から教職に就き、戦後における歴史教育のあり方を思索し、独自の「世界史」のあり方を追究した1名の人物、および戦中を児童・生徒として経験して戦後の教育を受けて教職に就き、多くの授業実践と執筆活動を通じて日本史教育・世界史教育を先導してきた2名の人物について、その生い立ちから、受けてきた歴史教育、取り組んできた歴史教育に関わる回想を整理した。それぞれの実践や執筆等の活動がいかなる意識や経緯、時代的背景のもとでなされたのかなどを確認するとともに、その他の多くの有益な情報を得ることができた。

(5) 「社会科世界史」の特質

本研究を通じて提示できる「社会科世界史」の特質の一端は以下のような点である。「社会科世界史」は、生徒自らが世界史像を作り上げることが目的とするものが基本である。そのため、

「社会科世界史」は、生活している生徒を出発点とする場合が多い。「社会科世界史」は、従来の(戦前の歴史科)外国史教育と対極にあるものと位置づけ、その克服・脱却のための新たな歴史教育の創造として取り組みが始められている。これら・・・は、世界史教育の原点に位置づけられるものであると同時に、今日まで続く課題となっている。「社会科世界史」は、生徒を中心に据えつつ社会科教育と歴史研究の双方に基盤を置くことが目指されている。ただし、生徒・社会科教育・歴史研究の3者への重点の置き方は一様ではない。しかも、「社会科世界史」では、社会科と世界史の双方を固定したのとは捉えていない。世界史教育の展開において、おおむね1960年代以降「社会科世界史」が教育行政から実質において放棄されたにもかかわらず、「社会科世界史」授業の取り組みは高校教師たちによって継続した。ただし、世界史という枠組みが高校にしか存在しなかったことを反映して、「社会科世界史」の取り組みは高校教師たちのみによって継続したという側面もあった。その取り組みは、授業のみならず教科書や関連図書の作成など様々な手段をもって進められた。

「社会科世界史」には広狭様々な定義がありうることもあり、本研究で提示した点は「社会科世界史」の特質のごく一部にとどまるものとする。さらに検討を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 茨木智志	4. 巻 16
2. 論文標題 高等学校社会科「世界史」の授業はどのように始められたのか 当時の史料と回想・聞き取りからの考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 茨木智志・大木匡尚	4. 巻 16
2. 論文標題 インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 二谷貞夫先生	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 55-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 茨木智志	4. 巻 53
2. 論文標題 昭和館所蔵『中等歴史一』墨塗り本について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 総合歴史教育	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 茨木智志	4. 巻 15
2. 論文標題 戦時下における中等歴史教科書に関する基礎的考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 25～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正弘、茨木智志	4. 巻 15
2. 論文標題 インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 武井正教先生	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 87～103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 茨木智志	4. 巻 17
2. 論文標題 歴史的展開から見た日本の世界史教育の特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 1～17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 茨木智志・大木匡尚	4. 巻 17
2. 論文標題 実教出版『高校世界史』白表紙本に見る1977年度の教科書検定について 二谷貞夫所蔵本を中心に (上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 34～84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 茨木智志・大木匡尚	4. 巻 17
2. 論文標題 インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 宮原武夫先生	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史教育史研究	6. 最初と最後の頁 85～118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 茨木智志
2. 発表標題 昭和館所蔵『中等歴史一』墨塗り本についての考察
3. 学会等名 総合歴史教育研究会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 茨木智志・大木匡尚
2. 発表標題 実教出版『高校世界史』白表紙本に見る1977年度の検定について—二谷貞夫所蔵本を中心に
3. 学会等名 歴史教育史研究会第14回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 茨木智志
2. 発表標題 国定日本史教科書の中の外国史が担った役割 歴史教育における自国史と世界史を考える前提として
3. 学会等名 日本社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 茨木智志
2. 発表標題 戦時下における中等歴史教科書に関する基礎的考察
3. 学会等名 歴史教育史研究第13回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 茨木智志
2. 発表標題 東書文庫所蔵『中等歴史一』墨塗り本についての考察
3. 学会等名 歴史教育研究会第15回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長谷川修一・小澤実編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 261
3. 書名 歴史学者と読む高校世界史 教科書記述の舞台裏	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>研究成果報告書として、『戦後の「社会科世界史」の理論と実践が有する特質の解明（2017年度～2019年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』（2020年、全168頁）を発行した。</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考